

第3回京都市未来共創チーム会議
議事録

日 時：令和6年11月21日（木）10：30～12：10

会 場：梨木神社 参集殿

出席者：

安野 貴博	合同会社機械経営 CEO/AI エンジニア/起業家/SF 作家
池坊 専宗	華道家・写真家
伊住 禮次朗	茶道総合資料館副館長
大井 葉月	京都市職員（東山区役所）
大竹 莉瑚	市民公募委員
杉田 真理子	一般社団法人 for Cities 共同代表/都市デザイナー
田口 成人	京都市職員（環境政策局）
都地 耕喜	EVER 株式会社 代表取締役
仲田 匡志	株式会 SOU 代表取締役/U35-KYOTO プロジェクトマネージャー
三川 夏代	株式会社メルカリ 『mercari R4D』

以上10名
(五十音順、敬称略)

1 開会

2 議事

(1) 第2回までの議論の構造的整理

司会

まずは今まで出てきたものの振り返りと、その関係性をあらためて確認したい。今ある京都独自の価値観、京都らしさのようなキーワードを基に導き出されてきた11個のキーワードをブルーの付箋で示している。そしてそれを阻害しているもの、阻んでいるもの、少し京都で今残念になっているものを、グレーの付箋で出している。

グリーンの付箋は、2050年にも京都市民が愛し、世界の人に誇りと憧れを持ってもらうためにはという問いで出てきた10個のキーワードである。

今日は、ここのグラフィックレコーディングを付箋でスケールアップしてみた。それぞれが思うグリーンが出てきた理由を、時間を経てもう一度、このブルーに立ち返りながら議論してみたい。皆さんの中で、裏表の関係でもいいし、これとこれは強く関係しているのではないかという何か気付きのようなものを、まずそれぞれ出していただけないか。

伊住委員

不可分性のようなものを、1つのテーマとして話し合ってもいいのではないか。今の時代は先人からのバトンがつながれてきているという時間軸もそうであるし、継承されてきた文化財がまちの中に蓄積されていることも、多層的な歴史の積み重ねがまちとして出来上がっているのだと思う。

不可分性のようなものは、自然と人間の関係性という話もそうであるし、今回話すべき京都的なものとは何かという、すごく大きなコンセプトを考える上で、とても重要なテーマなのではないか。その中で、人と歴史が紡いできた多層的な文化のようなものから、最終的に生態系全体で価値を捉え直すという、何か大きな理念のようなところから下ろしていく考え方もあっていいかと思う。

人と人との関係性もそうであるし、やはり時代を超えて京都のまちの中で、例えば陶芸家の方であれば、孫の世代のために土を確保しておく方もいらっしゃる。長い歴史の中で過去、現在、未来が不可分につながっているという感覚は、やはり京都では非常に強いと思う。そういった時間的なことと、それから都市全体として、京都にいる私というものは、京都というまちと不可分であるという感覚は、京都に住む人間としては非常に自覚がある話ではないかと思った。

仲田委員

一体感があるという部分が、今を生きる私たちの共同体的な一体感と、過去から現在、未来というつながりでもあるというところは、本当に京都に暮らしていてすごく感じる。その上で、これは尊敬する先輩の受け売りの言葉だが、この一体としての不可分性を時間軸で捉えた時に、今を生きる私たちが未来から見てどのような過去でありたいのかというメッセー

ジなのではないかと思った。今回の話の先にある未来から見た時に、今の私たちが何をする
ことでどのような過去になったのか、未来から見た時にどのような過去になりたいのかを議
論する場であると再確認した。

分からないことを話しながら、未来に向けた点を並べていくことで、昔の人たちがこれは
つながるとこう見えるねと星座を見つけたようなことを、私たちはやっている。座標軸を付
けていって、それがつながった時に、何か1つの絵やビジョンになっていくような議論がで
けるといいと思った。思うままに座標軸を出して、これをつなげると何か線になって、絵に
なって、これがビジョンだというふうになれるといいなど、お話を聞きながら重ねて思った。

都地委員

多層的な文化という観点においてもそうだが、やはり文化の中でも有形のものや無形のも
の、本当にさまざまあると思う。私がこういった未来を考える上で大事だと思うのは、無形
の部分。有形で残っているものはある意味、結果だと思う。なぜそれをつくるに至ったか、
つくろうと思った人、残そうと思った人がどういう意思で残してきたのか。まず先人になら
うべきだと思う。

まちづくりにおいて、本当にどこの都市も全部同じようなモデルにならないようにするの
であれば、先人たちが残してきた意思や概念などを正しく理解していく。文化の本質的価値
は、有形だけではなく、その有形をつくった本質的な意味、意図をしっかりと汲んだ上で、で
は今を生きる私たちがどういった歴史をつくっていいのか。今京都にあるいいものをどの
ようにデザインして、よい未来をつくっていくべきなのか。ここを深く考えていきたいとい
う思いはすごく強い。

田口委員

不可分性のような話を聞きながら、あえて少し卑近な話に戻すが、過去の参照点がすごく
重要というのはそのとおりだが、それが今すごく見えにくくなっていて、そもそも私たち
には、現在の関係性の網の目のようなものすら見えなくなっているように思う。

ある知り合いが、ワークショップで「自分の仕事の関係者は誰なのかを全部挙げてみる」
ということを企業の人としたときに、みんな全然出すことができなかったと言っていた。例
えばオフィス1つを考えても、プリンターの整備をしている人や清掃業者など、いくらでも
出てくるだろうに、それが出てこなかったという話だった。本当にそのまちのプレーヤーが
どういう人たちなのかに目を向けることができれば、多くのものが連動していて、それは時
間軸も超えて過去にもきちんと目が向いていくのではないか。

大竹委員

私の理解が追いついていないところもたくさんあるが、その中で感じたのは、全体的に境
界線をどこに設けるのかを、京都の人は意識的になのか無意識的になのか、うまく採用して
きたのではないかとということ。例えば過去、未来、現在を長い時間軸で捉えるというのは、
多分その境界線を、現在だけを切り取らずに物事を考えるが故の地続き的な価値観だと思う。
また、自然についても、多分自然を内のものというか、境界線の中として捉えて、その中に

自分や京都もあると考えている。

私などはサステナビリティやダイバーシティという言葉や概念のほうに親しみがある世代というか、そういう言葉を聞く世代である。やはりそういうものは「多様ではないこと」が前提の多様性であるし、「自然は距離があるもの」という前提から出てきた、「守っていく」という価値観だと思う。しかし京都的と言われた時に、自然を内のものとして捉えたり、時間も地続き的に境界線を曖昧に捉えたり、人間関係も境界線をどこに持つかを意図的に決めずに、理解されてきたのではと感じた。

その中から私が思い出したエピソードだが、私が今洛西で行っている活動の中で、自治会と一緒に何かをやっていくことがある。私たちと自治会の2つの立場で話す時にはすごく距離を感じるが、そこに第三者の別の地域の人がやってきた時は、私たちのことをすごく親しみを込めて扱ってくれる。

そういうことも、うまいなとも思う。その距離間の取り方や、そういう境界線を柔軟に変えているのだなど、人間関係の築き方からもすごく感じる。だからこそ、地域というものはすごく難しくもあるが、面白さも感じている。私的には全体的にそういうところが京都を感じる考え方だと思った。

司会

うまく境界もつくるし、その境界は実は曖昧であり、その境界の引き方は、実は場面や人によっても少し違っていたりして、統一的なものがない。これは実は知恵のようにも感じるということだが、なぜこういうものが生まれたのだろうか。

都地委員

人と人との近さだろうか。京都市は都市としてはそんなにすごく大きいわけではないが、人と人との距離は、住居単位でも結構近いと思う。それによつてのライン引きが癖になっているのか、自然と生まれたものなのか。

伊住委員

まちという単位もあるだろうし、職業のギルドのようなものもあるし、御所のお出入りということのもそうであるし、色々なコミュニティが重なり合いながら京都というまちが出来上がっている。そういうところで、何となく曖昧な領域をみんなが認識しながら取り組んでいるところはあるのだろう。

大竹委員

トップダウンだと境界線がはっきりしていると思う。制度などもそう。誰か偉い人がいて何か話すとなったらそれに従うので、境界線や制度なども、例えば所得によって変わったりする。例えば税金を払っていたらこうだなど、システムや制度などトップダウン式のものは境界線がはっきりしている。

一方でそうではなく、ボトムアップというか、何かじんわりと、結果的にできたもの、制度というよりかは風土のような、言語化できない制度のようなものは、やはり曖昧。京都に

はそういうボトムアップ的なものが多いイメージがあるので、それで曖昧性が担保され得るのかと思う。

伊住委員

政局におけるトップが色々とダイナミックに変わってきたのが京都だと思う。そういう意味では、民間レベルで考えるコミュニティが育まれてきやすい歴史はあっただろう。

都地委員

西陣のようにまちにおいての役割のようなものもあったのだろうか。

伊住委員

それはあったのではないかな。職業的な意味でのつながりがあると思う。

都地委員

すごく伸びているところに、いろいろな産業の方々が話を聞きに行って、発展につなげてきたのではないかな。

三川委員

今の議論とはつながらないかもしれないが、まず、今回の題目は2050年までの長期ビジョンの策定ではあるが、これは全然長期ではない。2050年までと変に時間軸でピン留めしないほうがいい議論ができるのではないかな。一旦この2050年、25年後というのを忘れて、それこそ100年や1000年という単位で、私たちがどう京都を愛し続け、愛され続けたいのかを考えてもいいのかなと思った。

それから最初の問3と問1のつながり、関係性については、大きなキーワードは「人」と「創造」と「場」だったと思う。「人」のところに注目すると、時間を超えて関係がつくられたり、その関係性が伝統的な関係性に由来するところが京都の価値であり、それはこの青と緑の付箋でうまく出ている。

一方で、アンケートの結果を見ると、居住地域に対する愛着や誇りに関して、愛着を感じると回答した割合がどんどん低下しているところは、注目する価値があると思う。これはおそらく、京都らしい伝統的な共同体の価値がどんどん失われているということ。先ほど西陣の話は誇りに思いつつも、どんどん希薄になってきているのではないかな。ではここを残し続けるにはどうしたらいいのかというところでキーワードになるのは、京都のレギュレーション、ルールではないかな。これがうまくビジョンで示せるといいと思う。

ただ、多分京都の人というのは、Howを押し付けられるのは少し違う気がする。京都の「らしさ」で挙がっているように、みんなが有機的に動いていくのは、きっとHowが提示されておらず、自分たちでどうすればいいのかを考える余白がある状態だからだと思う。ビジョンで示すのはHowではない。余白があって、かつ、時間にとらわれずにゆったりと考えられるものが提示できると良いのではないかな。

大井委員

愛着を考えた場合には、やはりコミュニティの話は出てくると思う。私自身はちょうど今の基本構想と同年であるが、やはりコミュニティというものがデジタルなところと関わってきていると思う。今のこのコミュニティや地域の場をつくられている世代の方は、人々とのつながりのようなものを大事にされていると身近に感じているが、今のこのデジタルな世の中で、余白は大事だと思う。決め切られたお堅い文章だと、どうしてもそこに当てはまろうとしてしまうのではないかと。多様な理解、解釈ができる部分が含まれているほうが良い。

私は前回杉田委員がおっしゃっていた女性委員がピンク色の文字で記載されているのはどうなのかという話にはすごく共感した。自身も大学の時はずごくそういうことを気にしていた。人のくくりを考え直せる機会ではないだろうか。

池坊委員

ゴールやその過程、Howを決めるのは京都にそぐわないのではないかというお話があった。例えば、私たちお花の集団でも、だんだん参照するものが遡っていく。少し前は明治以降をずっと研究してきたが、それがいつからか江戸の後期から前半に向けて遡っていき、あるいはそれより前の室町、安土桃山に遡って、それを今に生け直してみたりする。そういう古いもののほうが、普遍的な魅力や通用するものがあったりする。

新しいものと古いものとの共存というのは、西洋化などいろいろな文脈があるが、その時の宣言は、今は古くても当時は一定の意味を強く持っていたということもある。なので、今は今なりのことを提言すればいいのだと思う。

また京都は参照点をたくさん取れるのがいいところかと思うので、300年前に立ち戻ったり、1000年前にも戻ったり、あえて柔軟な振り返り方で今を定義づけるといいのではないかと。

司会

そういう歴史の積層を見ていく中にレファレンスできるものがあると思った時に、池坊委員は未来をどのように見ようとされているのか。

池坊委員

単純な新しさというのはすぐ古くなっていくので、新しさを求めること自体がもう古い感じがする。古いものをどんどん古くしていくほうが面白いまちづくりや人間関係になるかと思う。

デジタルで情報を収集したり、人間関係をつくることは、30代以降の世代にすごく浸透しているとは思いますが、やはりデジタルだと、プラットフォームのエコーチェンバーや、共通性がある人が固まる傾向にもある。

例えば、手書きだと何を書いてもよく、極端なことを言うとはみ出してもいいが、デジタルだとそういうことはできない。そういう意味では、アナログな人間関係や声かけ、地場のつながりは、頻度としては減っていても、重要性は必ず増していくと思う。ミックスするとしても、そういうアナログな意味が強まっていく時代になるのではないかと。

司会

オンラインの方にもお聞きしたい。安野委員、いかがか。

安野委員

まず、私自身がスタートアップや会社経営をしている中で、まちとまちとの差別化をするという観点をしっかり持つことが大事ではないかと思っている。そういう観点においても、他のまちではない、交換可能な基本計画ではないものを作ることは非常に大事かと思う。さらにその中で、単語のレベルでずらしていく。ずらすことが目的ではないが、結果としてずれたものができるというのは非常に大事なことはないか。ややもすると、こういった会議をしていく中でどんどん平均的なものに回帰していきがちではあるが、改めてこの会議の中で、差別化すること、平均回帰しないことの重要性を確認できるといいかと思う。

ピーター・ティールという有名なベンチャーキャピタリストが、いいスタートアップはカルトの1歩手前であり、カルト宗教ほどの偏りはないものの、その1歩手前くらいの、自らのコミュニティの強固な価値観のようなものを持っていると言っている。まちで1歩手前だと良くないと思うものの、3歩か4歩手前くらいの何か強固な価値観を共有できていると、世界中がどんどん同じまちになっていく中で、京都が京都であり続けられるので、何かそこに対してW i l lを持つことは非常に大事かと思う。

2つ目が、自然と人間を対置しない、人間と非人間を対置しないこと。これも非常に京都の強みになっていくのではないか。これから25年間というタイムスパンを見た時に、恐らく世界的に見ても、技術と人間の向き合い方が非常に変わっていく。例えば、A Iのようなものが出てきた時に、人間と非人間の存在として、E Uなどではそこに大きな対立関係を見出しているが、京都ではそもそも自然と人間も一体であるし、もしかしたら新しく出てきた存在である技術に対しても、他のまちでは成しえないような関係性を構築できる可能性があると思う。ある種、自然との向き合い方の違いのようなものは、極めて現実的なレベルで、技術との向き合い方やその上で起きる産業、文化などに強く影響を及ぼす時代になってくると思うので、何かそういうポジションを取れそうだなと思った。

最後の3つ目は、過去に生かされ未来に生きているという話。これを聞いて、現代で一番有名なS F作家のうちの1人であるテッド・チャンさんという人の本を思い出した。テッド・チャンさんは「あなたの人生の物語」という短編の中で、エイリアンが来るまちを書いている。そのエイリアンは人間とは全く違う知性を持っていて、世界の認識の方法も違うが、過去と未来と現在をあまり区別して認識できない。ある種京都というまちは、この過去、未来、現在をあまり区別せず認識できるようなビジョンを持っていると思う。作中に出てきたヘプタポットというエイリアンほど極端な例ではないかもしれないが、京都に住んでいると、あるいは京都に触れると、過去と未来と現在の捉え方が変わるような、何かそういうビジョンづくりが可能なのではないか。

杉田委員

今の安野委員の話がとても面白かった。S F作家ならではの視点だと思う。この後ぜひそ

の短編小説も読んでみようと思った。

これまでの話と、グラフィックレコードの内容を改めて見返して、『スマートシティとキノコとブッダ』という本を思い出した。これは副題として「人間中心『ではない』デザインの思考法」と付いているが、ランドスケープデザイナーの石川初さんが著作の1人に関わられていて、要は人類と異なる知性の象徴としてのキノコと、人類を超越した知性の象徴としてのブッダを召喚して、スマートシティを切る話である。現代の都市計画やまちづくりのようなものに東洋思想を持ち込んだり、無分別智という仏教ならではの考え方を持ち込んだり、そこに人類を超えた生態系、軸が人間だけではない生態系を持ち込んだりしていて、かなり複雑な内容の本である。そこにはスマートシティという、いわゆる未来都市の象徴のようなものが扱われていたり、何千年と続く仏教や、人間以外の存在が含まれていたりして、未来も現在も過去も全て語っている本だと思う。日本だけではなく、地球だけではなく、宇宙のことも語っている。この本は、2024年の9月に出たが、この年の、この日本の、この社会の、この人たちだからこそできた議論である。また、これは東洋思想を知らない人や、それこそ欧米中心的な考え方の中だけで都市を考えている人には語れないことなので、この議論が日本から生まれたことは素晴らしいと思いながら読んでいます。

その上で、これまでの議論を振り返ってみた時に、今私たちは2024年のこの場所で、この京都で、このメンバーだからこそできる議論になっているのかと、改めて考え直したいと思った。出てきたキーワードに関しても、多様な人や価値観が共存しているとか、コミュニティが大切、余白が大切だというのはそのとおりだと思うが、それは例えば東京でも言えるかもしれないし、10年前にも、20年後も誰かが言っているかもしれない。そう考えた時に、その話は今、2024年のこの共創チームのメンバーでしか出せないのか、どのような文脈で紐づけてそれを語るのかということについて、いま一度意識的になりたいと思った。そうすることで、今安野委員がおっしゃったようなカルト2、3歩手前ぐらいの、より研ぎ澄まされた議論ができるのではないかな。

伊住委員

杉田委員から無分別智という話があった。分別というのは、ある程度人間が知恵を付けていって、分かりやすくするために物事を区分していくことだが、本来は分別のない世界だろうというのが、無分別智を分かりやすく説明すれば、そのような説明になると思う。話の中で出ていた、不可分であるということと、この分別のない世界、無分別は、共通すると思って聞いていた。

先ほどの過去に生かされているという話や、池坊委員からのご指摘の中で、過去にレファレンスを求めることの豊かさが京都にはあるというのは、私にはすごく納得感があった。そう考えた時に、京都の都市計画についても、豊臣秀吉もまちづくりをして、過去にもやはり京都市をどのようにつくるかを考えてきた先人たちがいる。それは25年前の宣言とは別に、もっと遡れば京都市のまちづくりを、市というものがなかった時代から京都というまちを考えて、ルールを作っている時代もあった。そういう各時代の中で、宣言とは言わないかもしれないが、どういう都市計画が宣言としてあったかを、遡って振り返ってみる機会があってもいいかと思った。

この議論の中に先人の議論も巻き込んでいく。そして積み重なった先に、私たちのこの新しい、これから考える京都市の宣言が出る。やはりずっと都としてのあり方を考えてきたまちだと思うので、こと京都においては、そういう過去の事例を参照して、この宣言に生かしていくことは重要かと思った。

過去にどういう宣言が出ていたかという調査は、今後の会議の中でご報告する機会を頂ければ、私も研究者として、何かまとめてみなさんに事例を紹介することもできると思う。十分なものができるとは思わないが、何かそういう、京都というのはこういうまちづくりをしていたという前提をみんなで共有しながら作っていくことも、これからできたらいいと思いながら聞いていた。これができるのは、こと日本においては多分京都だけだと思う。

杉田委員

それはすごくやりたい。私はずっと都市計画が専門で修士まで取った。ヨーロッパの移民集中居住区域のプランニングの歴史をやっているが、これは時代によって、政治体制や社会的な背景によって全く作り方が違うので、過去を振り返って、だから今こうなっていると気付くことが大切である。その上で、では次は何なのだという現在地を確かめることは、とても大切な作業だと思った。

今回私も委員として参加させていただくに当たって、頂いた資料や、過去のプランニングの文章を読んでいたが、例えば本当に身近な例として、今の自転車の取り締まりが厳しいのは、10年前にこういう議論がなされていたからだということが分かったりした。

仲田委員

世界文化自由都市宣言は、皆さんと一緒に学べる大事な宣言ではないかと思っている。京都はすごくユニークな都市計画のガイドラインを引いていると思う。日本の経済が危ない時や大変な時にこそ、景観が大事だということを打ち出していたのが京都である。

文化分の経済という言葉がこの間教えていただいたが、文化という大事なこの基盤が分母にあるので経済活動ができる。つまり、文化があって人が集まり経済活動ができる、この循環なのではないかと思った。京都市が出している世界文化自由都市宣言では、「全世界のひとびとが、人種、宗教、社会体制の相違を超えて、平和のうちに、ここに自由につどい、自由な文化交流を行う環境都市をいうのである」とある。まさにこれまでの議論で、オーバーツーリズムの課題や、二元論ではなくバランスであるとした時に、京都はこの自由を取るバランスを大事にしてきたまちであり、そこに対して文化と経済が共存できているのだと思う。過去を参照する時にこの宣言は勉強になると思う。

(2)「2050年にも京都市民が愛し、世界の人に誇りと憧れを持ってもらうまち」 の解釈・定義について

司会

今まで一番議論に上がったのは、京都市民には0.1 関われる市民がいてもいいのではないかということ。

また、「世界の人が愛し、世界の人に誇りと憧れをもってもらう」について、「憧れ」より「親しみ」なのではないかという話もあった。
まずは京都市民をどのように考えるべきか、考えを伺いたい。

田口委員

「市民が」から考えるよりも、「愛する」というところから考えたほうが良いと思った。これまでの議論を踏まえても、人の行為が大事だと思うが、例えば、少なくとも自分が愛着を持つためには、自分が何か行為をした時に、即時ではなくとも、ある種それが変わったり、維持されたりなど、自分との影響関係があるのだと信じられる対象が必要だと思う。そう考えた時にコミュニティというのは、その対象を共有している人たちのことだとも考えられるのではないかな。

愛着をみんなが失っているというアンケートがあったが、それはやはり、自分が何かをして何かが変わるという体験が圧倒的に少ない世代だからではないか。『京都市政史』という分厚い本を読んで、明治期に明治政府ができて、町衆の人たちと明治政府が緊張関係を持ちながら一緒に頑張っている時代から、国家総動員体制になって微妙にバランスが変わっていく歴史があったと感じた。やはりそういう歴史の中で、市民という人たちは、自分たちでまちをつくる感覚を失っているのではないかな。

そう考えた時に、例えば、まちを良くしてくれる人だったら、京都市民でいいのではないかな。あるいは、憧れを持つということは、人がそういうものに参加したいと思うことなのではないか。何かもう少し「愛する」ということの解像度を上げることができないだろうかと思った。うまく言えないが、そうすれば愛するということと、行為がきちんと紐づいて、具体的に考えられるのではないかな。

池坊委員

1つは、主体の問題で、ピュアに考えるのだったら、この京都市民と世界の人々をまとめてしまえばいいかと思う。これまでも、0.1京都人がいたら0.8京都人もいるし、1.0京都人もいるという話だった。週末だけ帰ってきたり、あるいは1年の内の春と秋だけいたり、将来は帰ってきたいという人、昔京都に住んでいた人など、いろいろな形で京都に関係する人々がいるわけだから、統一するのが分かりやすいと個人的には思う。

もう1つは、「愛し」というか、「誇りと憧れを持つ」というところである。主体から京都に対する思いとして、愛する、慈しむ、いとおしいという感じかと思う。しかしそれだと、関わり方やそれに対するフィードバックについて少し足りないのではないかなという話があったので、京都からその主体に対して返ってくるようなワードも入ったほうが良い気がする。

少し古いと言えど古いが、京都を慈しみ、かつ、担うというようなもの。そこで各々、0.1市民だったら0.1の責任を担っていく。権利と義務ではないが、こちらが投げて向こうから返ってくるような要素が入ると、バランスがよいかなと思った。

仲田委員

文化自由都市宣言の主語は「全世界の人々が」で始まっていた。苦勞するのはまさにその

曖昧さと、今池坊委員がおっしゃったように、それぞれの関わり方で果たせる貢献があるというこのサイズ感によって、バランスを均質化しづらい時代が来ていること。それも同時に話すべき議論かと思った。今までの、いわゆる一時的な取組のルールや、あり方のバランスが難しくなってきたからこそ、今、個別最適化されてきた社会の中で、どういう関わり方があるかを選べる時代と捉えるのも1つかと思う。

オムロン社のサイニック理論では、自律社会という、個人の価値観や思想に基づいて一人一人が幸せに暮らしていける社会が近付いてくると言われている。同時に健康経営をはじめとした、社員一人一人の健康を会社が考えていける時代になったときに、個の幸せも尊重しつつ、時間軸の中での京都のあり方が選べるということでもあるのではないかと。

そういう意味では、「愛す」ということも、これをしたから愛しているということではない。愛しているからそういう行動が生まれるのではなく、むしろこういう行動をした結果、愛していたのだと気付くような、何かそうしたことのほうがしっくりくると思った。

大竹委員

市民とは何なのかと今ずっと考えていた。市民というのは多分便宜的単位であり、国民などもそうだが、その国という共同体として、1つの国に1つの民族、1つの地域に同じ文化や価値、アイデンティティを共有する人たちが住んでいて、政治的に管理しやすいのが「市民」なのではないか。市民か市民ではないかで税金を取るか取らないかが変わってくる。しかしまちというのは、その税金を払っている人だけがつくっているわけではない。市民というものはそもそも管理する、される関係性の中で誕生した価値観な気がする。それはいわゆる「国民」も近いと思うが、出発は便宜上の単位だと思うので、捉え直すことにはすごく意味があると思う。

市民というのは第三者的な視点、内と外を分けるのもあると思う。私はこの前ルワンダに行ってきたが、ルワンダは、すごく大きな民族単位での対立があった国であり、植民地にされた時に、フツ族、ツチ族という民族対立が意図的につくり出された。植民地下に置かれているという支配構造から目を背けさせるために、その民族同士の対立構造をつくったという歴史的背景があることを学んだ。現地の人から、本来はそこまでの区分はなく、生産活動を起点に何となくの違いはあったものの、お互いに違う民族であるとか、共同体であるという意識はそもそもそこにはなかったが、第三者がやってきて、彼らの身体的な特徴や経済活動での特徴によって、民族という区分を規定していったと聞いた。

私は、「市民」は、便宜的な単位として区別するというニュアンスがあると思う。本来あったのか、なかったのかは分からないが、その区分を支配や管理をするために意図的につくり出したイメージがある。しかし今はその単位で、全世界が内と外を分けている。だからその市民を考え直すということ自体はすごく意義がある行為だと思う。杉田委員がおっしゃっていたように、今の京都のここの私たちで、市民の境界線や、何を単位として市民とするのかを考えることに意義がすごくここにあると思った。

三川委員

私は2、3年前に京都に引っ越してきた。自分が京都市民かと問われると、戸籍もこちら

に移してはいるものの、いまだに自信を持ってそうは言えない。皆さんのように老舗だったり、商いをしているわけではないし、会社も本社は東京にある。京都で暮らしているが、京都市民と自信を持って主張できないというところが本音である。ただ、今議論があったように、京都を好きかどうか、愛しているかどうかというところ、愛している自信はある。それを考えると、やはりこの愛のグラデーションというところは、あまり問わないほうがいいのではないかという意見にはすごく同意。

主語はすごくシンプルに、「京都を愛する人が」などでいいと思う。

その愛と、後半の「誇りと憧れをもってもらう」というところについては、いろいろなグラデーションがある中で、京都に対する愛が京都そのものにどのような価値をもたらすのか、そこはもう少し深掘りしたいと思った。

京都への愛が、京都そのものに今後どのような価値をもたらすのか。つまり、誇りと憧れなのか、親しみなのかは分からないが、それがもたらす京都のさらなる魅力や、2050年、2100年に続く何かとは何だろうというところは、もし時間があれば議論したい。

都地委員

京都を愛していく中で、有機的な人とのつながりというところが、一番その「愛」に反映させやすいのではないかと思う。市といった存在というよりかは、京都に住まうような人や、海外の人とつながりがあるなど、何かしらの人の関係を持って、まずそこから愛の一步が生まれていくと感じている。

その愛というのも、今度はそれがコミュニティ化して大きくなっていったら、そこからまた新しく文化をつくっていくということもあるだろう。自分たちでコミュニティとして大きくなってきて、コミュニティとしてうまくいったら、すごく居心地のよさを感じられたりしたら、どんどん誇りにつながっていく。そして、対外的に見てすごく幸せそうであったり、楽しそうであったり、期待できるような要素を見つけて、ようやく憧れにつながっていくのではないか。

愛するところがやはり一番大事かと私は思っている。

安野委員

3つほど、平均回帰しないような少し尖った言い方で、京都市民をこう考えたほうがいいのではないかという案をお出ししたい。

1つ目が、市民とは何かというところで、安易にグラデーションを問わないほうがいいのではないかとおっしゃったのは、そのとおりだと思う。それをさらにもう一歩進めるとすると、京都というのは土地に縛られるのではなく、全世界の人類の脳内にある認知の領域において、京都というものの認知的な領土拡大を目指していくような考え方があるかと思う。

単語としての京都については、実はAI技術を使うと、どのくらいの大きさに位置付けられるかや、単語の高次元空間があった中でどういう位置付けなのかが解析できるようになってきている。例えば、そういった全世界で使われている言語分布のようなものに影響を与えていき、脳内での量的拡大のようなものを目指すというスタンスもあるのではないか。

2つ目は、25年スパンは違うのではないかとおっしゃっていたのもそのとおりで、例え

ば25年先ではなく、基本的に1000年先を考え続けるというポジションはあると思う。目先のことを考えず長期目線、それも超長期目線を持とうということも考えられる。これは、ぱっと見は耳触りが良いが、長期を考えるということは短期を犠牲にすることでもあるので、マイナス面、プラス面をよく考えながら議論を尽くしたほうが良いと思う。

ただこの超長期目線を持てるまちは非常に少ないし、それが持てていることは非常に強みになると思う。1000年くらい歴史がある京都くらいしか、これから先の1000年ももちろん考えているなどとは、言えないのではないか。それを考えると、建築物を造るという話ではなく、サグラダ・ファミリアのような超長期プロジェクトが1,000個くらい走っているまちというのが、超長期目線の、京都というまちとしてのあり方になる可能性もあるかと思った。

3つ目は、人間だけではなくさまざまな生が、渾然一体となって共存ができるまちにするという話のところで、動植物や人間、機械、AIとも渾然一体ということを目指し得るのではないかと。やはり京都には自然に対する非常にユニークな感性があり、自然と人間は、お互いがお互いを支配し使うような関係ではない。であるならば今後の世界において、AIなどの新しい知性に対しても、同様に使う、使われるだけではない関係性を構築できるのではないか。

あえて平均的でない考え方として、1000年先の超長期を見よう、そしてさまざまな生と共存できるようにしよう、また、積極的に全人類の脳内で京都という認知的領土を拡大していこうという話をした。もちろん賛否両論があっても然るべきだと思うし、自分でもこうすべきだと確信を持って言っているわけではなく、少し議論の投げ込みとして提案した。

都地委員

先ほどのカルト1歩手前ではないが、語弊を恐れずに言うなら、「京都教」のようなもの。もちろんそれは、正しく京都を理解していくということが前提ではあるが、その中で本当に良いものを対外的に示し続けていくことは非常に重要だと思う。いろいろな哲学者や宗教家がいたなど、今だからこそすごく心に来るような考え方をしている人々について、外にどんどん伝道していくことがあってもいい。

大竹委員

京都教というのは、やはりすごく私的にはいいと思った。結構私は、心がいいなと思ったものがあると思っている。それは先ほど言ったとおり、言語化できないものだと思うし、分かりにくさもあるかもしれないが、何かいいなと思うことを結構普段から大事にしてきた。

京都教という、別にいわゆるキリスト教のようなものだけではなく、行動の指針となる考え方も宗教のようだと思う。私は学生の立場だから学生教な気がするし、学生という範囲でしか、やはり物事をあまり考えられない。また日本にいと、日本的な文化、価値観の中でしか行動できないということがすごくある。海外に行って、海外ではすごく開放的に過ごしていたのに、いざ日本に帰ってきたら、列にはきれいに並ぶし、電車の中ではすごく静かにする。その文化に入ってくると、宗教ではないが、その文化に染まりにいくというか、自然と染まってしまう。それも一種の宗教で、文化というのは宗教かと思う。価値観的にそれに

従う。それを当たり前だと感じて疑わずに行動する。それは宗教に近いと思う。

しかしキリスト教にも、仏教などにもいろいろな宗派がある。ベースとする価値観は同じだが、それぞれが結構好き勝手に自分たちで信仰をつくっていく。また立ち戻ったりしつつ、それぞれの自分の思想を、その地域に合った解釈を付け加えていくようなものもいいと思った。

それが先ほど安野委員が言っていた、認知領域の拡大、これはすごく難しい言葉だが、いろいろな京都の解釈が世界各地にあってもいいと思う。宗教のように、京都教のいろいろな広がりがあると面白いと思う。

司会

途中ではあるが、時間の都合上、市長からここまでの議論を振り返られて一言頂戴したい。

松井市長

これは誰のビジョンなのかということについて、もちろん私は行政制度上、京都市民から選ばれた市長なので、当然京都市民を意識せざるを得ないが、私自身も東京と京都を行ったり来たりしている人間であり、これからの時代は1カ所にずっと住むのではなく、職業も複数持つし、居住地も複数持つ時代。ましてや京都にそんなに来たことはなくとも、京都のことが好きでたまらないという来訪者もいる。もちろん一時的には京都市民が対象のビジョンであることは認識しつつ、京都を愛する全ての人に捧げるビジョンでなければいけないと思っている。

それから行政制度上は、この25年の長期構想を過去から引き継いで、それを考えることが私の責任だが、「来し方行く末」という言葉があるように、1000年の都と言っているわけだから、このまちが少なくとも都として、このまち独自の文化を形づくってから今日に至るまでの来し方を振り返り、そして今の我々が、将来を展望してどのようなまちであってほしいか、どうあるべきか、あるいは来訪者も含めてどのようなまちとして、脳内の認知的領土拡大を図るか。そういう議論をしていただけるといい。

長期ビジョンの内容は審議会、市役所内、京都市議会でも議論があるので、皆さんは皆さんにしか出せない言葉を使っていただければいいと思う。

目標値として、世界人類の脳内の認知的領土拡大を図るというのは面白いと思った。世界中の人たちにある種の憧れや素晴らしいまちという思いを持ってもらう。

また、私は市民が愛すると同時に、自分たちが誇りを持てることもすごく大事だと思う。愛するとは、自分の体の一部、あるいはあたかも自分の子どものような存在ということ。ただ単に好きで仕方がないということだけではなく、このまちのためにどうしようという認識を持ってもらうことがすごく大事である。

私が提唱している「居場所」と「出番」や、「新しい公共」というのは、いかにまちの公ごとを自分のことと同一化するか、いかに自他の役割の境界線を越えるかということである。境界線は平然とあるが、その境界線を越えるということが実は私の人生のテーマである。それはある時は行政の縦割りを越えることであり、ある時は一般的に言われている行政と行政の客体となるような市民、受益者である。行政官も市民あるいは生活者なのだから、ここに

線は引けないはず。だから線はあるが、京都というまちについても、自と他ということについても、あるいは人間と自然ということについても、できるだけ垣根を低くしたい。

人間中心主義と言うと、1つ間違ったらすごく傲慢な考え方になってしまうので、そのバウンダリーを意識しつつ、そこを超えた視野を持ってもらおうということが1000年の歴史だと思う。1000年先を考えた時に国境や市境がどうなっているか、恐らく人類と宇宙の関係がどうなっているかも分からないので、京都市が求める長期ビジョンに書けるかどうかは別として、いろいろな立場があり、それぞれの知見のある皆さんに思い切り遠慮せずに好き放題に言ってもらって、こういう価値観を大事にしろと放り投げて、京都市役所や私にインプットしてほしい。あるいは、審議会とさまざまな化学反応を起こすこと自体にも意味があると思う。

最終的にどの言葉を取捨選択するかは、恐らく政治判断になるが、例えば今日の話だと、我々は大人なのだから分別を持ちなさいという言葉を使いがち。やはり、人間は分別を持たなければいけないというのは大切な言葉で、戒めに使う言葉ではあるが、分別を一回取り払うこともあっていい。あまり分別を持った優等生のまち、平均点のまちではなく、圧倒的にそこを突き抜ける人たちがいるということが、私の思う突き抜ける世界都市である。

ただ、突き抜けてはいるが、二元論的にこの突き抜けは悪だというのではなく、この突き抜けもいいね、こちらの突き抜けもいいねということをしてできるだけ共有する。多様性という言葉が陳腐であるとしたら、多層性、多層のほうが何か京都らしいというか、歴史の積み重ね、年輪のようなものを感じる。

私は価値多層主義という言葉が割と好きである。多様性はみんなが使っているが、恐らくこの言葉は使われていない。例えばワーディング1つを取っても、そのとおりになるかどうかは分からないが、こういう言葉を使ってほしいというワーディングや尖った考え方や、ここでしか出ない考え方をたくさん出してもらいたい。

今日は後ろで聞いていてとても面白かった。シンプルな問いであっても、そのシンプルな問いがいろいろな人たちの引き出しを開ける効果があったのではないかな。また可能であれば、邪魔にならないように後ろにいたい。

司会

では、時間が許す限り、もう少し議論を進めたいと思う。

伊住委員

安野委員から、平均回帰しない案を3つほど出していただいたが、渾然一体になっている京都というのはあると思う。いろいろなものが混じり合っている、割と穏やかな静けさがあるような。渾然一体となっているが、ただそれが賑やかに盛り上がってごちゃごちゃしているわけではなく、一定の調和が取れているような雰囲気は結構京都らしいと思う。これはイメージの話だが、そういう形は京都らしいやり方としてあると思う。

これまで何度か議論が出たが、京都市という枠の中にある人間だけではないもの、例えば、動植物や京都市に拠点を構える法人もまちを構成する要素。人間だけではない、動物や植物などと一緒にまちづくりをしているのだというドリームプランが描けるかは分からな

いが、何かそういう渾然一体とした感覚のようなものが、宗教都市であり、芸術都市であり、歴史都市でもある京都というまちからビジョンとして示されると面白い。その中には、結構ぎょっとする感じを受けるような内容があってもいいと思う。

池坊委員

「京都を愛する人が」という、少しロマンチックなワードがすごくいいと思った。愛するということは、何となくあの人がいいなと思ったり、付き合っていくとだんだん新しい魅力が見えたり、あるいは悪いところが見えても嫌いになれなかったり、そういう少し清濁併せ飲むような含み、多層なニュアンスが含まれている。「京都を愛する、そしてこれから愛していくであろう人が」というふうに、未来に広げていくこともできるし、あるいは「京都を愛し、そして愛していくものが」でも良い。鴨川や山々が京都を愛しているか分からないが、人間以外となると苔も山もみんな含まれるかもしれない。そういう少し詩情的なニュアンスがすごくいいと思った。

京都は独自に、鎌倉市など他の市に還元されないような表現を目指していこうという話が時折出てくる。私も京都は、御所を中心に歴史があって、伝統文化もよく保存されている特殊な都市だと思う。しかし、やはり分断の時代にあっているいろいろな人を包摂してほしい気持ちもあるし、差別化をすることが結論になるのは少し違う気がする。

過程や議論の中身や多様性など、一つ一つのワードの議論のプロセスにおいて非常にエッジが立っていることは大事かと思う。その結果としてもものすごく個性が立っていたり、あるいはものすごくプレーンなものになったり、最初の世界文化都市宣言のワードと共通するものが出てきても、全然いいのではないかな。例えば、2000年ぐらい前のお釈迦さまの言葉は、当時においてはものすごく革新的で、階層性を壊すようなものだったが、それがなかなか実現できず、どの時代においても読み直されて普遍的な価値を持ってきた。それが今にも残っていると考えると、今から500年、1000年先を見据えたときに、結論としてはものすごくプレーンになってもいいと思う。話し合った結果としてもものすごくエッジが立っていてもいいと思うが、差別化、ポジション取りが先行するのは少し違うだろうと個人的には思っている。

大井委員

私自身は京都に生まれて出たことがないと以前からお話ししているが、実際私が自信を持って京都市民だと言えるかというと、それもまた違うと思っている。京都の人は洛中や洛外という考えがあり、私は山科なので、それこそ京都の人ではないという認識がある。そういうものも含めて京都らしさだとは思いますが、私自身の状況も重ねると、「京都を愛する人」というくくりはすごく素敵だと思った。

杉田委員

先ほどの、土地ではなく京都という認識的な領土の拡大という議論のところで思い出した話で、以前京都市に私の活動をインタビューしていただいた時に、英語で記事が出たが、そのタイトルが、邦訳すると「京都のバクテリアで世界を発酵させる」というものだった。そ

の時は気持ちが悪いと思って、こんなに気持ちが悪いタイトルでいいのかと聞いた記憶が思い返されたが、これも多分同じようなことを言っているのだろう。いい意味での気持ち悪さだと思った。ぎょっとする感じという単語も出たが、ぎょっとするだとか、少し「えっ」というような、それぐらいに何か突拍子もない考え方や議論がここで作れるのではないかと思った。

市民0. 1 的な考え方、例えば3日間いたらもう慣れてしまうだとか、AIや動物など、人間ではないものも含むという考え方をもう少し深掘りしてみたいと思った。それに関連付けて、市民についての議論はすごく大切だったと思う。

ルワンダの事例が出たが、同じアフリカの民族のマサイ族は、マサイ族に生まれなくとも、なりたいたいと思ったら入れると聞いた。もちろんいろいろ身に付けなければいけない知識や慣習はあるが、民族としてではなく、そういったアイデンティティの塊としてマサイ族というものがある。

私も移住組として京都にいるが、ツチ族・フツ族的な分断があると感じている。例えば京都で何か活動をする時に、あなたはどうせ京都出身ではないだろうと、私も何度か言われたことがある。父が京都でなどと言いながら説得するが、それ自体もすごく心地が悪い。ツチ族・フツ族の分断的な話だと思っている。

マサイ族になりたいからなるというような、アイデンティティの塊としての京都があって、土地に縛られずに、認識的、認知的に拡大ができるのではないか。この辺りも皆さんとぜひディスカッションしてみたい。

3 閉会

司会

時間となったので、本日の議論はここまでとしたい。

本日は長時間にわたり議論いただき、感謝申し上げます。